



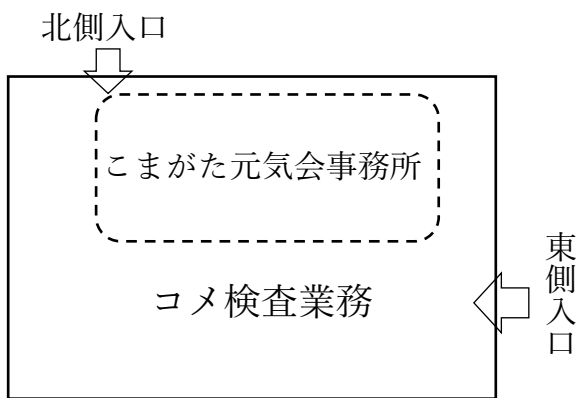
第11号

# こまがた元気会だより



## ～コメ検査期間中のこまがた元気館の使用について～

9月からJAさんのコメ検査業務が始まりました。  
期間中は、建物の一部をこまがた元気会の事務所として使用させていただくことになります。



JA 旧駒形購買店舗



現在の事務所の様子

## ～各部会等の動き～

各部会等の主な活動状況と今後の予定をお知らせします。

部会・グループ等名	主な活動内容・今後の予定
A (農基盤) グループ	10月6日(水) ミニ農産物直売所の設置検討の一環として、高郷町・大谷直売所を視察予定
B (雄国山麓) グループ	重点的な取組として、そば打ち名人養成塾(仮称)の立上げを検討・協議中
C (歴史・文化等) グループ	9月29日(水) 田中集落御田植祭りを含め会津の御田植祭りの調査・記録に携わられたNPO法人民俗芸能を継承するふくしまの会の小澤弘道氏の話を聴講
D (支え合い) グループ	10月14日(木) 10月23日の生活支援支え合い会議の事前打合せを兼ね、今後の具体的な支え合い活動について協議予定
八百比丘尼尊茶話会	10月1日(金) 当地の八百比丘尼伝承に関し、全国各地の長寿の比丘尼伝承、類似伝説、熊野信仰、庚申講等の関わりなどを学習予定
生活支援支え合い会議	10月23日(土) 集落でのサロン(集いの場)づくり支援についての協議と市の進める地域包括ケアシステムの構築について学習予定
代表者等懇談会	10月31日(日) 主に道路の交通安全上の危険箇所等について情報交換し対応策を協議する予定

令和3年9月30日 発行：こまがた元気会

《連絡先》喜多方市塩川町中屋沢字田中乙3 (里の駅こまがた元気館)

電話 080-2805-1050 (事務局：大平)

メール koma.genki7.7@gmail.com

《編集協力》NPO法人かけはし (代表理事 石島 来太) 喜多方市常盤町5004-1

## ◇駒形の見どころ探訪◇

今号から、不定期で駒形地区の良いところを紹介するシリーズ連載を開始いたします！

第一回目は「狐堰（きつねぜき）」。ぜひご覧ください。

わたし達の故郷、駒形地区の足元を見直すと、びっくりするような、自慢したい遺産がいろいろあることに改めて気付きます。今後そのような見どころをシリーズで（不定期）紹介しますが、今回1回目として、産業文化遺産とも言える「狐堰」を取り上げます。

☆☆☆☆☆☆☆☆

南北朝時代が終わり、室町時代が始まろうとする、今から約630年前のことである。早魃（かんばつ）が会津地方を襲った。

苦しんでいる農民を救うために、地元の松崎に住む地

頭 小滝右衛門氏は、川の水を引いて田圃を拓き、お米がいつも沢山獲れるようにしたいと願った。

小滝氏は村人と共に川の水をどのように引けばよいかを、田中集落舟森山のお稲荷様に占っていただいた。神社の巫女様がお稲荷様の神託を聞き、「明るる年の如月 初午の日を待つべし。」と告げた。

このご神託に従って、一年後に再び詣でた。その日は朝から小雪が舞って、野山は一面、白一色になっていた。すると、一匹の白い狐が現れて、東南の方角へ走り去り、足跡を残した。これはお稲荷様が狐を遣わして、川の水を引く水路の場所を教えて下さったに違いないと考えた。

日橋川の流れの一部を堰き止め、駒形山の裾に沿い、南から北に辿る用水路の開鑿（かいさく）を直ちに開始した。応永二年（1395）六月一日、遂に総延長8キロメートルの水路工事を素掘り（すくほり）で完成させた。その結果、新たに二百町歩の田圃がまもなく生まれた。当時、一反当たり一石（=160 kg）の米が獲れて、一石の米の値段が一兩とすると、9千万円の増収となる。

（ところで、なぜここで田中稲荷と1年後の狐がお話に出てくるのだろうか。当時、僧侶を兼ねていた知識人である神官を巻き込んで、高度な水路設計に1年を要したのではないだろうか。）

このようにして作られたと伝えられている狐堰の用水は、六百年の間、一度も涸れることなく今もこんこんと流れ続けている。これは将に駒形

にあって一級の生きた歴史遺産と言えよう。現在は、堰管理組合が組織され、春と夏に水路の泥揚げ清掃と、堤防土手の草刈り作業を行って立派に維持されている。

水路は駒形山の西裾を北へ、

地図の等高線にほぼ沿って走り、右に左に、無理のない実に美しい曲線を描く。豊かな

水の流れはゆったりして、泡立つことはない（水路の地図はインターネット「狐堰用水」で検索できる）。近世になって、大深沢川を跨ぐ地点に興味ある逆サイフォンの原理が取り入れられている。流路に沿って、完成当時にも植えられていたであろう多様な巨老木が天を仰ぐ。まさに京都の「哲学の道」だ。遠くには、北の高祖根から南の大戸岳までの山容が眺められ、水路散策マニアにとっては誠に絶景、垂涎（すいえん）の場所である。



狐堰の出発地点



美しい水路曲線

（文献）

武藤寅男氏遺稿「六百年目の狐堰」、山田 勉 編纂（1993）。  
狐堰記念誌、白狐の足跡を追って六百年、狐

堰管理組合、記念誌編集委員会（1994）